



放送大学教授

岩崎久美子

私の職場は放送大学である。放送大学とは国が設立した通信制の大学・大学院であり、現在、約9.2万人の学生が学んでいる。単位認定試験やスクーリングの時になれば、学習センターに成人学習者が溢れ、その熱気を伴う姿に敬服し感銘を覚えすにはいられない。

このような成人学習者はどのような動因や誘因により学んでいるのか。知識の獲得、学ぶ人々の輪に入ること、生きることの意義の検討など、その理由は様々であろう。しかし、これらの人々に共通点があるとすれば、自分の意志で自発的に学習を決定していることである。成人学習の理論を提出しているノールズは、成人学習者の特性の一つとして、学習者の自己決定性を挙げる。

自己決定的に学習を行いうるスキルは、社会変化に対応する人生のサバイバルキットという例がある。ところが、現実には、このように自己決定性を持って自由に学習できる者は限られている。欧米の調査の多くが同様に指摘するのは、生涯学習を行う者の多くは、平均以上の教育を受け、所得水準の高い人々なのである。

国内の例を見てみよう。国立教育政策研究所が、数年前、雇用形態別（正規雇用者、非正規雇用者、専業主婦、求職者、無業者）に男女同数（専業主婦は女性のみ）の設計で成人の学習ニーズに関するウェブ調査を行っている。その結果によれば、正規雇用者は時間の制約から自分の状況にあった独学スタイルで学習を行い、非正規雇用者も同様の傾向であった。一方、専業主婦は、公民館等の費用のかからない学習機会を求めていた。求職者は職業につながる学習を希望し、職を求め行動に至らない無業者は学習ニーズが明確ではない者が多くいた。

生涯学習の二大障壁は、時間と費用といわれる。この調査結果から、職業人は限られた時間を自分で独学など工夫して学習し、専業主婦は費用のかからない公的機関を利用し学習する傾向があることがわかる。また、同様に次のような示唆も得られよう。

## 生涯学習社会の実現に求められるもの

一つは、自己決定的に独学ができる人と、動機づけが弱く情報も少ない人々といった学習の自由や自発性に対する格差があることだ。学習の自由を享受できない人々は、社会の弱者である場合も多く、社会政策上の支援が必要である。その支援とは、情報提供や学習集団づくりなどの伴走的支援から職業訓練のような指導的支援まで、学習者をセグメント化したきめ細かな情報提供・相談・指導などの学習機会の平等化を図る施策を意味する。二つ目は、学習動機はありながらも費用の観点から学習機会が限定される人々に対しては、公民館、放送大学など、無料、廉価な公共的学習機会の提供が重要ということだ。

学習は人生への前向きな取組みといわれる。知識経済下にある現代では、社会の中で仕事を見つけ、確保・維持するためには、新しい知識や技能の獲得は必須である。また、人間関係が分断化されがちな現代社会では、自分や家族が直面する困難なライフイベントに対し、独力での対応が強いられる場面もあろう。仕事や生活における課題は多く、その解決のためには、学習は常に付随して生じる。学習機会を持てる層と持てない層の格差を是正し、すべての人々が人生の危機を乗り越えるためのサバイバルキットを身に付けること、そして、自分らしく生きるために豊かな人生設計ができるよう学習の自由に対する機会均等が保障されること、これらのことが生涯学習社会の実現のための前提であろう。

正規の学校を出ずに、放浪と日雇い港湾労働者、そして読書と思索を続けた社会哲学者エリック・ホフファーは、「学ぶことをやめた人間には、過去の世界に生きる術しか残されていない」という人生訓を残している。学習するかどうかは自由であり強制されるべきことではない。しかし、人は、現在、そして未来を生きるためには学習し続けなければならない存在のようである。学習という行為が未来への鍵なのであれば、個人、組織、社会全体が、自由に学習の機会にアクセスできるような包括的な環境整備が重要なのである。